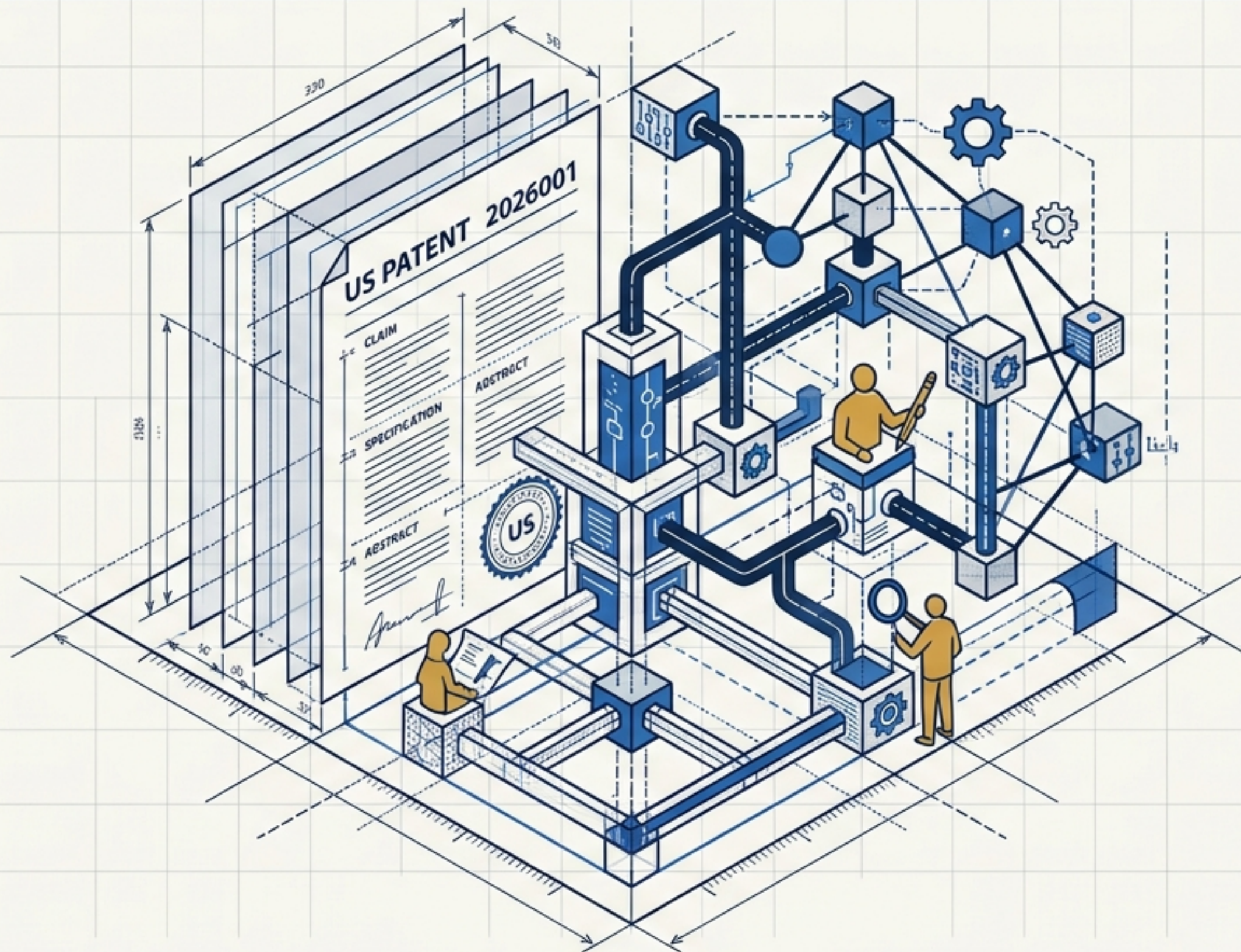
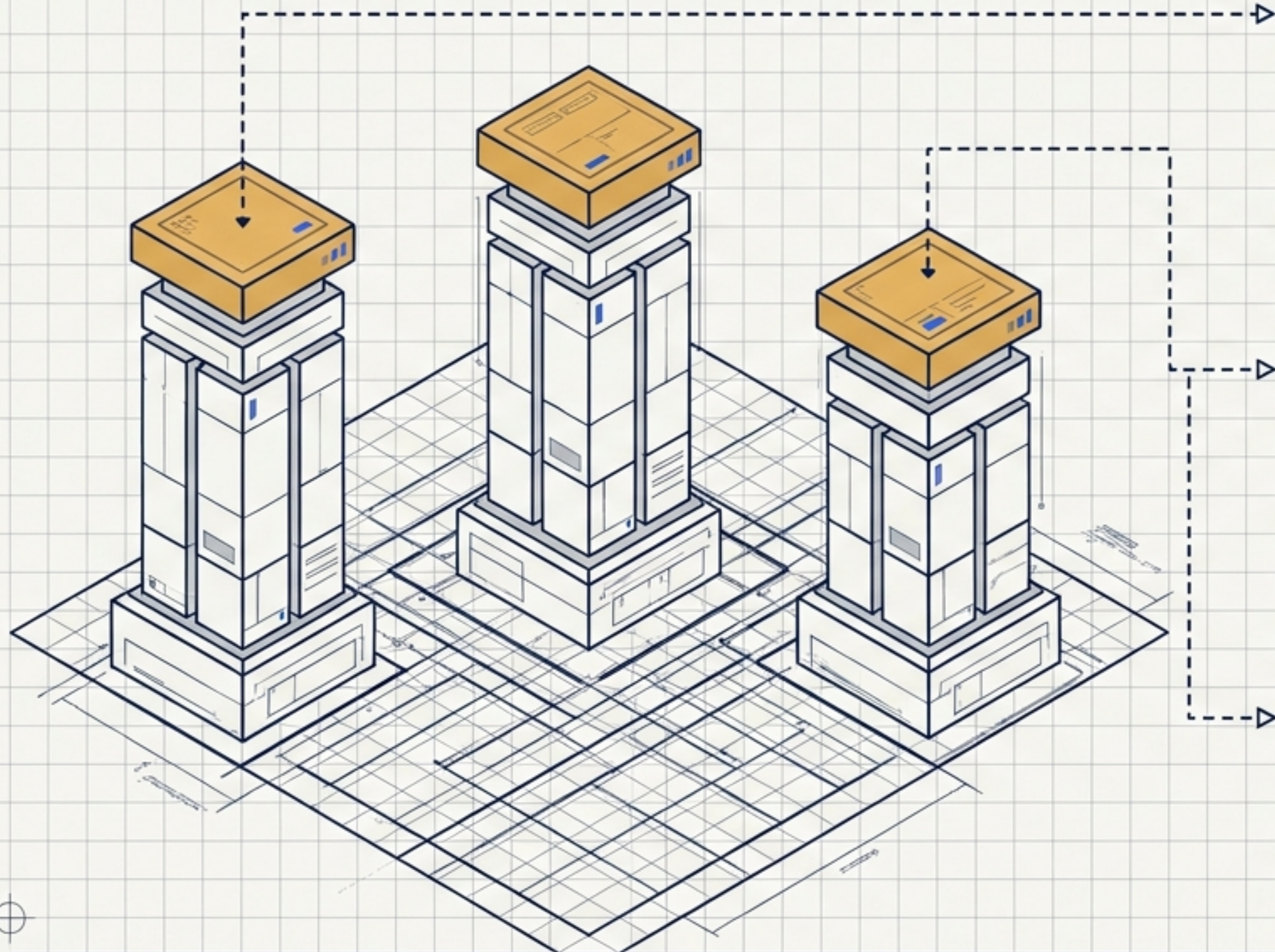




2026年 知財AIの実装パラダイム転換

「一括生成の幻想」から「多層的インフラ・人間中心ワークフロー」への進化と戦略的導入指針

エグゼクティブ・サマリー：3つの構造的シフト



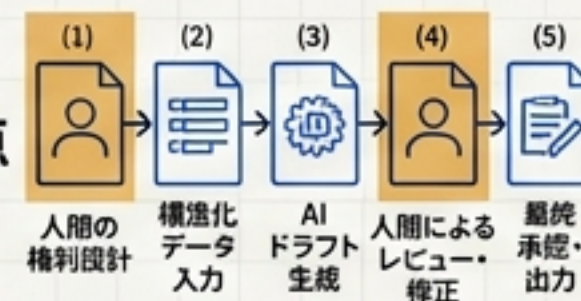
Shift 1: インフラの二極化

クラウド一辺倒のPoCから脱却。機密性に応じた「完全オフライン環境」と「MCP (オープンプロトコル) 連携」への適材適所な分岐。



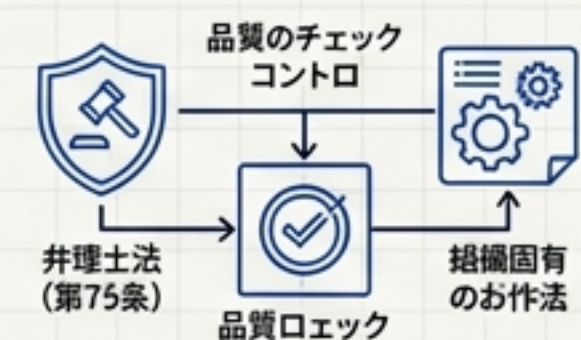
Shift 2: 分業体制の確立

全文自動作成の幻想を放棄。人間の権利設計(骨子)を起点とする「5段階の人間・AI協働パイプライン」の実装。

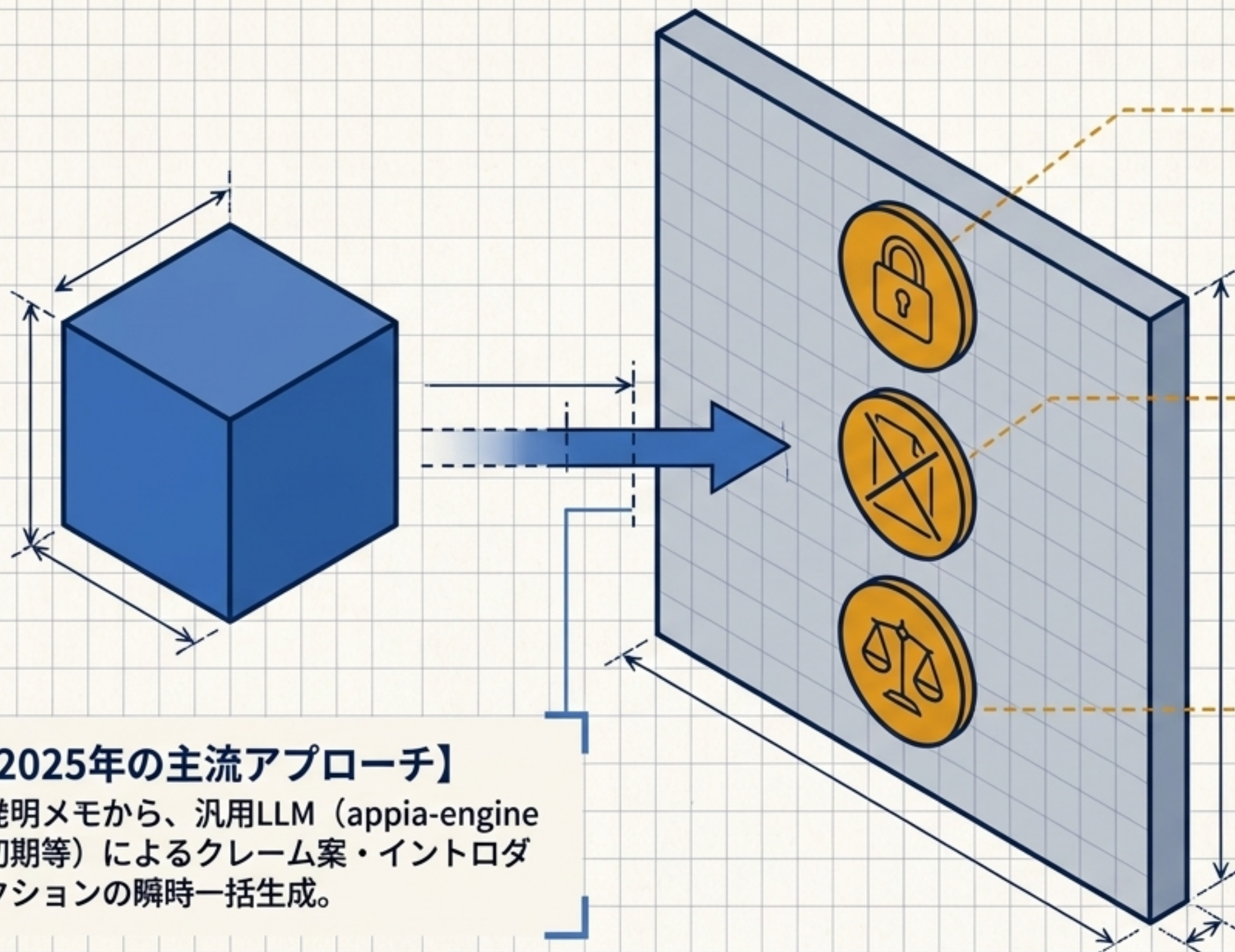


Shift 3: ガバナンスの深化

効率化の追求から、弁理士法(第75条)の遵守と「組織固有のお作法」を統制する品質保証レイヤーへの昇華。



2025年の幻想：クラウド一括ドラフトが直面した3つの壁



● 1. セキュリティの壁

未公開発明（コア技術）をパブリッククラウドへ送信することに対する、強固な社内コンプライアンスの抵抗。

● 2. ハルシネーションの壁

論理結合の破綻と広範すぎる請求項。AIの誤認が全段落に波及し、人間の修正負荷がゼロベース作成を上回る事態に。

● 3. 法的責任の壁

「AIが書けるか」の実証（PoC）に終始し、弁理士業務との境界・責任の所在が未定義。

【2025年の主流アプローチ】

発明メモから、汎用LLM（appia-engine 初期等）によるクレーム案・イントロダクションの瞬時一括生成。

技術構造と実務思想の完全なパラダイムシフト

2025年フェアの到達点

クラウドAPI依存・規約頼み

インフラ

2026年フェアの到達点

完全オフライン vs
MCPオープン連携の二極分化

概要からの一括ドラフト生成

生成アルゴリズム

発明構造化から始まる段階的展開

汎用LLMの事前知識のみ

参照データ

組織固有の過去明細書・
マルチモーダル情報

作業時間短縮効果の検証 (PoC)

法的統制

人間の判断責任中心・
弁理士法第75条遵守

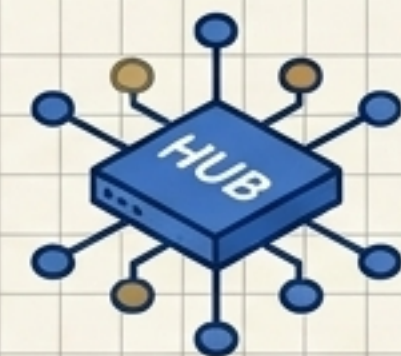
情報の性質に基づくアーキテクチャの二極分岐

起点：扱う情報の
「秘匿度」と「業務の性質」



【未公開発明・出願前コア技術】

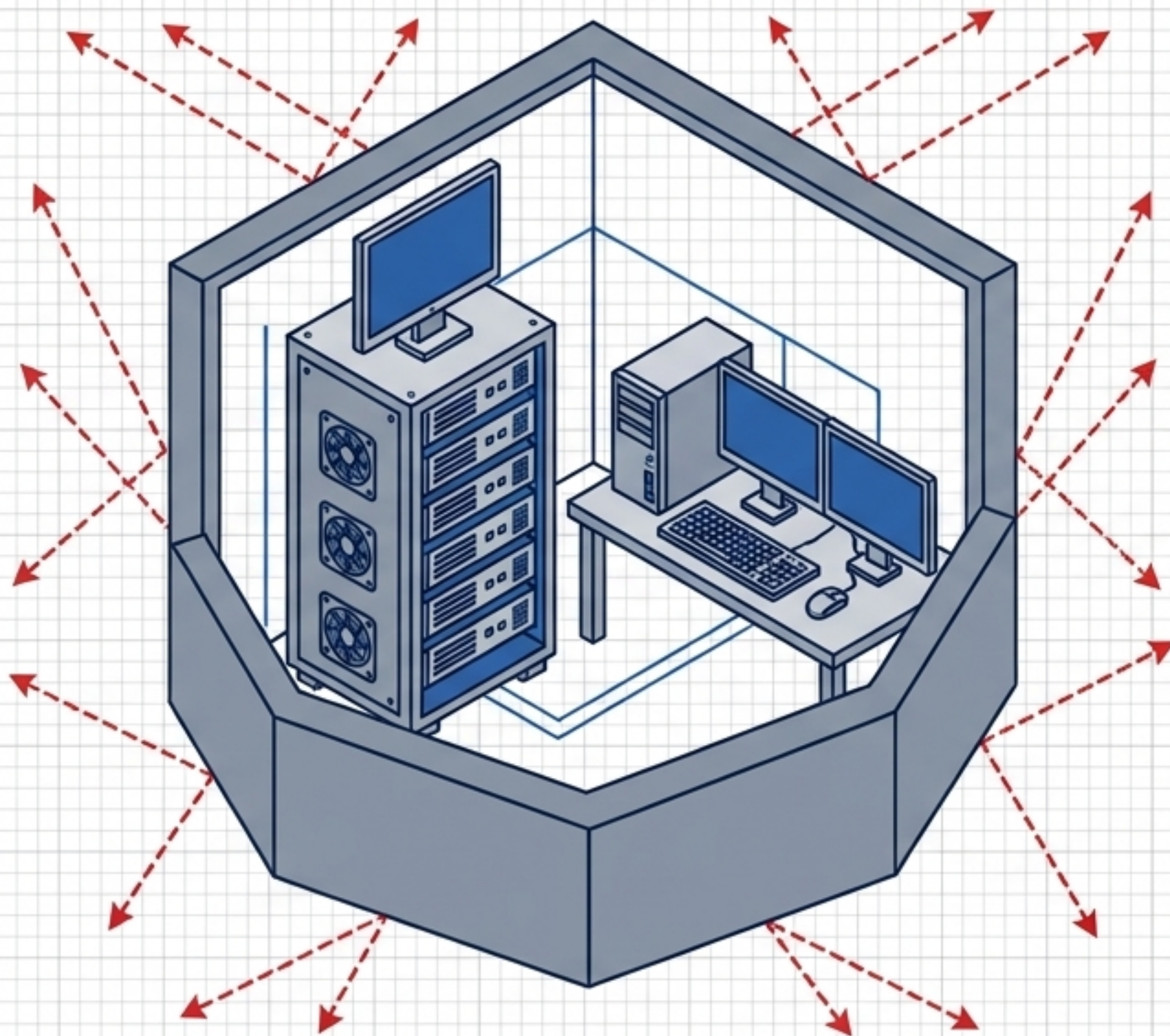
物理的に隔離された環境でのローカル処理。
情報漏洩リスクを根本からゼロへ。



【公開情報・文献照合・不備検証】

Model Context Protocol (MCP) を介した
外部データ・フロンティアLLMとの自律連携。

Architecture A: 最高機密を保護する完全オフライン基盤



目的：出願前の研究開発データや機密図面の外部送信リスクを物理的・論理的に排除。Qwen系などのオープンソースLLMを閉域で稼働。

1. トランスエヌ (N-Cube)

専用ハードウェアによる完全隔離。審査済み公報のみを学習。

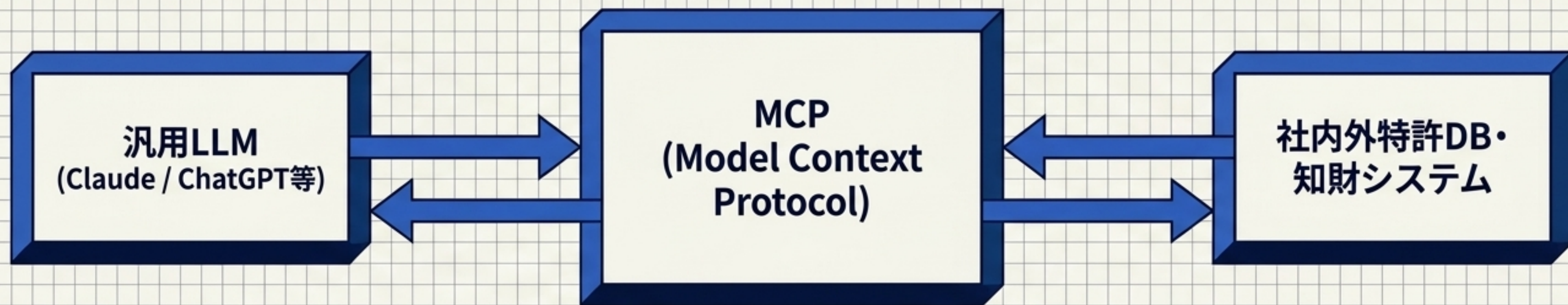
2. アイビーリサーチ (aipatONE)

クラウド不使用。ローカルPC上で図面・化学式からのマルチモーダル展開。

3. GMOブランドセキュリティ (GMO知財AI)

データが国外流出しない国内ソブリン環境での閉域知財管理。

Architecture B: MCPによるオープン基盤直結と自律エージェント



目的： 公開技術の精査、文献照合、50項目以上の記載不備検証など、外部データとの高度な照合において最新LLMの推論力をオンデマンドで活用。

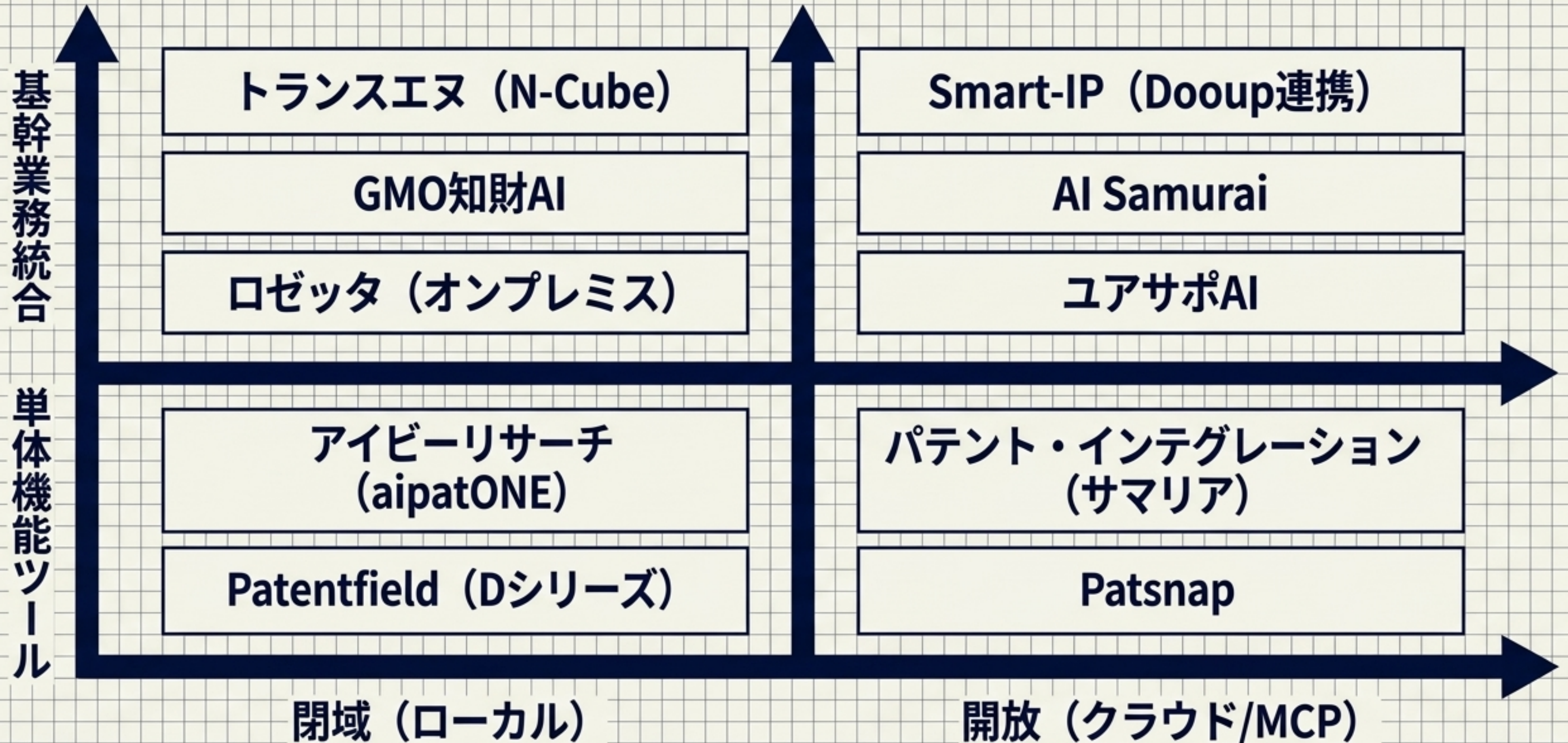
パテント・インテグレーション（サマリアMCP）

汎用LLMから特許DBへダイレクト接続。番号照合から不備検出までをシームレスに呼び出し。

AI Samurai

日米中DBとLLMを直結。先行技術調査から戦略可視化までを自律エージェントが連携支援。

2026年 ソリューション・ランドスケープ



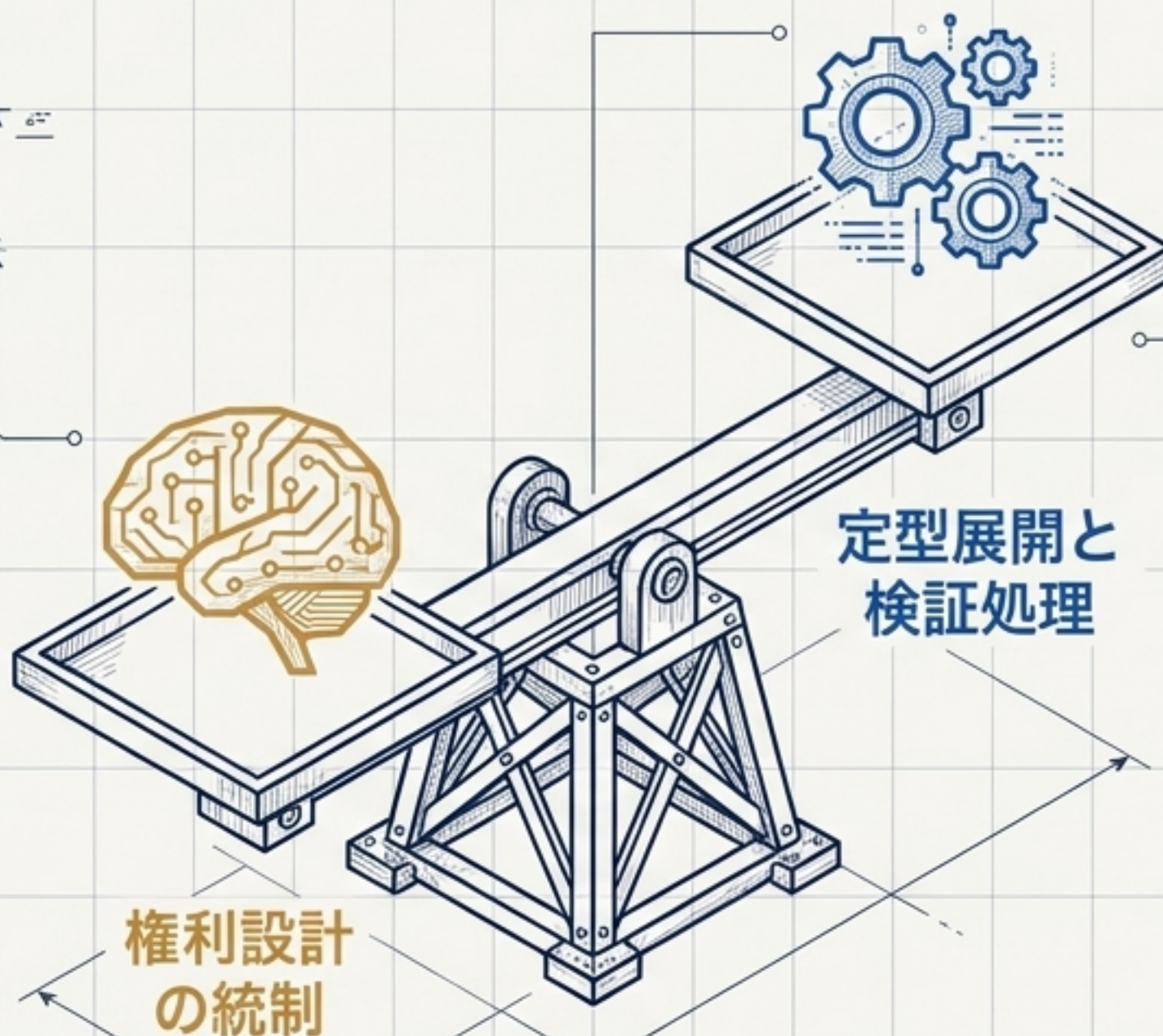
役割分担の確立：「一括生成」から「権利設計の統制」へ

人間の役割： 高度な法的・事業的判断

- 発明の本質把握
- 公知技術との境界画定
- 特許請求の範囲（クレーム）の上位概念化

AIの役割： 定型展開と検証処理

- 構成要件の文章展開
- 図面や化学式に基づく実施形態の記述
- 整合性検証・中間反論骨子の作成



人間中心の5段階 実務統合パイプライン



人間
(Human)

発明構造化

AIが抽出・
人間が補完

課題・差異分析

AIが差異抽出・
人間が本質精査

権利範囲設計

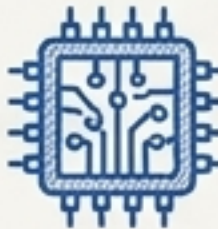
人間が上位概念化を
主導・クレーム骨子確定

段階的本文展開

AIが数段落生成・
人間が修正し文脈化

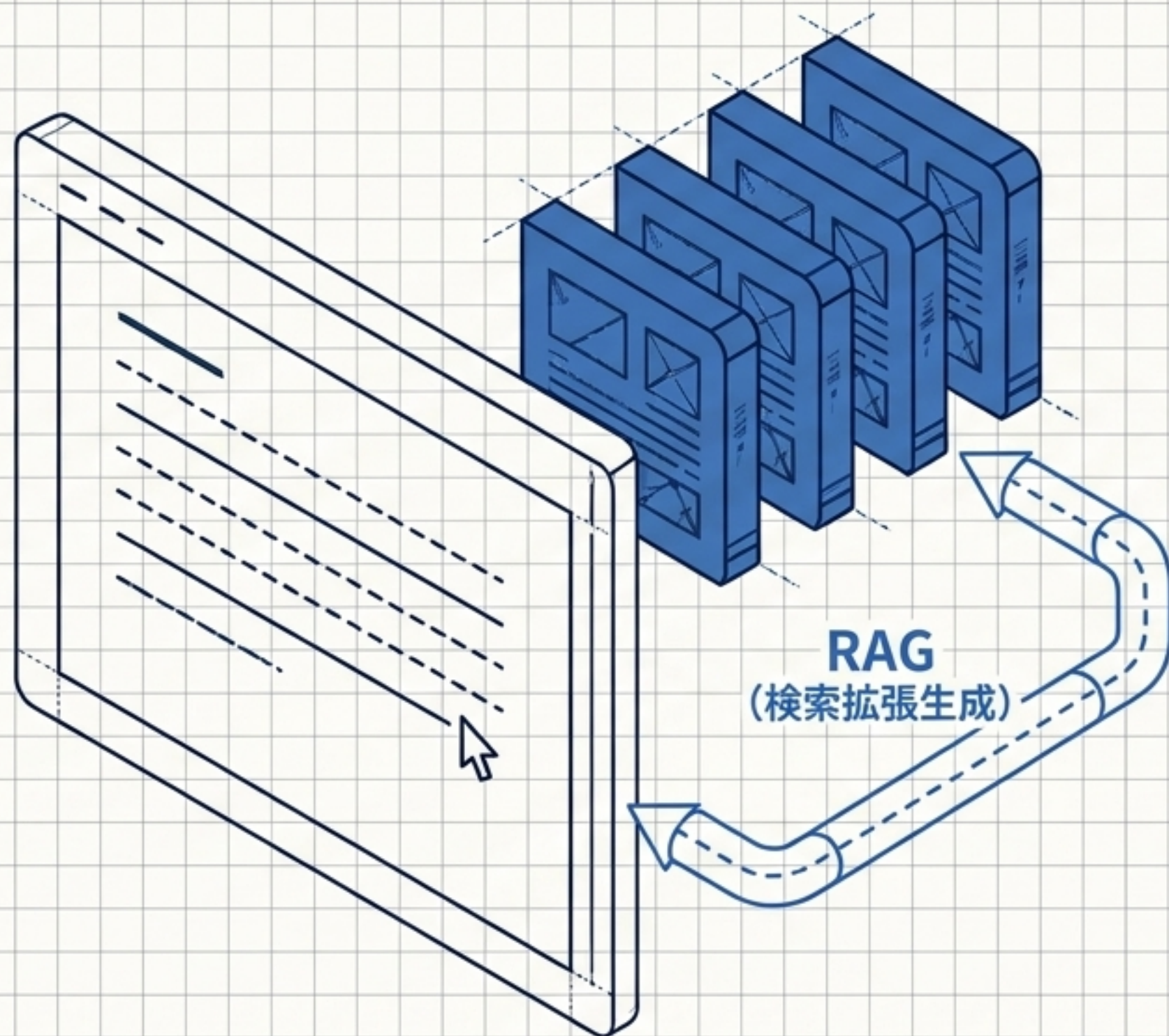
整合性検証

AIが50項目以上の
ルールで自動検出



AI

組織固有の「お作法」と暗黙知の継承



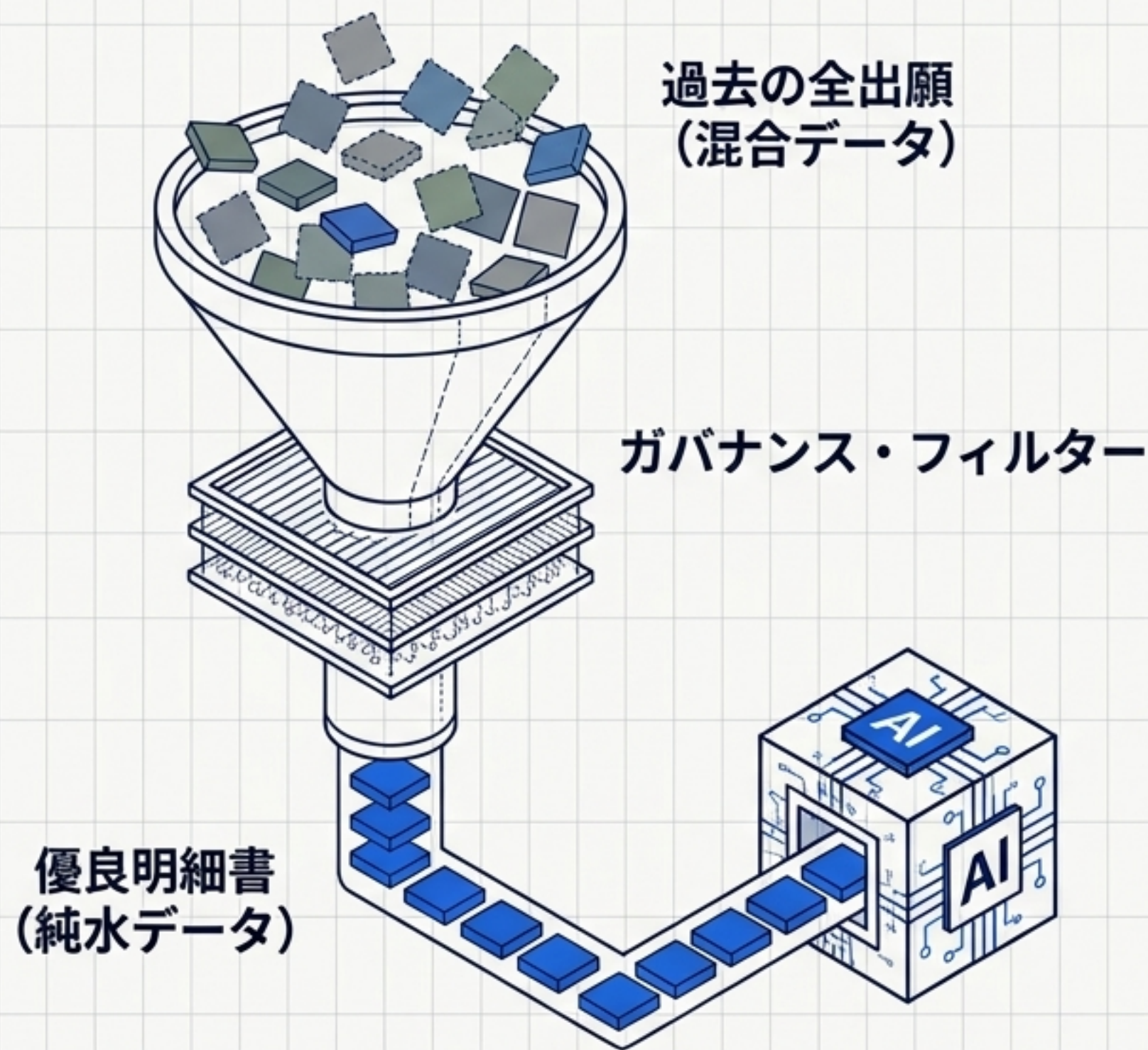
固有ナレッジのインジェクション

汎用モデルの滑らかな日本語ではなく、企業や特許事務所が長年蓄積してきた「独特の文体」「多義的記述のルール」「図面符号の付与基準」をAIに学習・参照させる。

ツール例と提供価値

- ・ユアサポAI：Wordネイティブ環境で過去公報・組織固有の判断基準を学習。
- ・価値：シニア弁理士の頭の中にあった「ドラフティングの暗黙知」をシステム化し、若手へ組織的に継承する。

データガバナンスと「脆弱な記載」の再生産リスク遮断



リスク：過去データの無差別投入

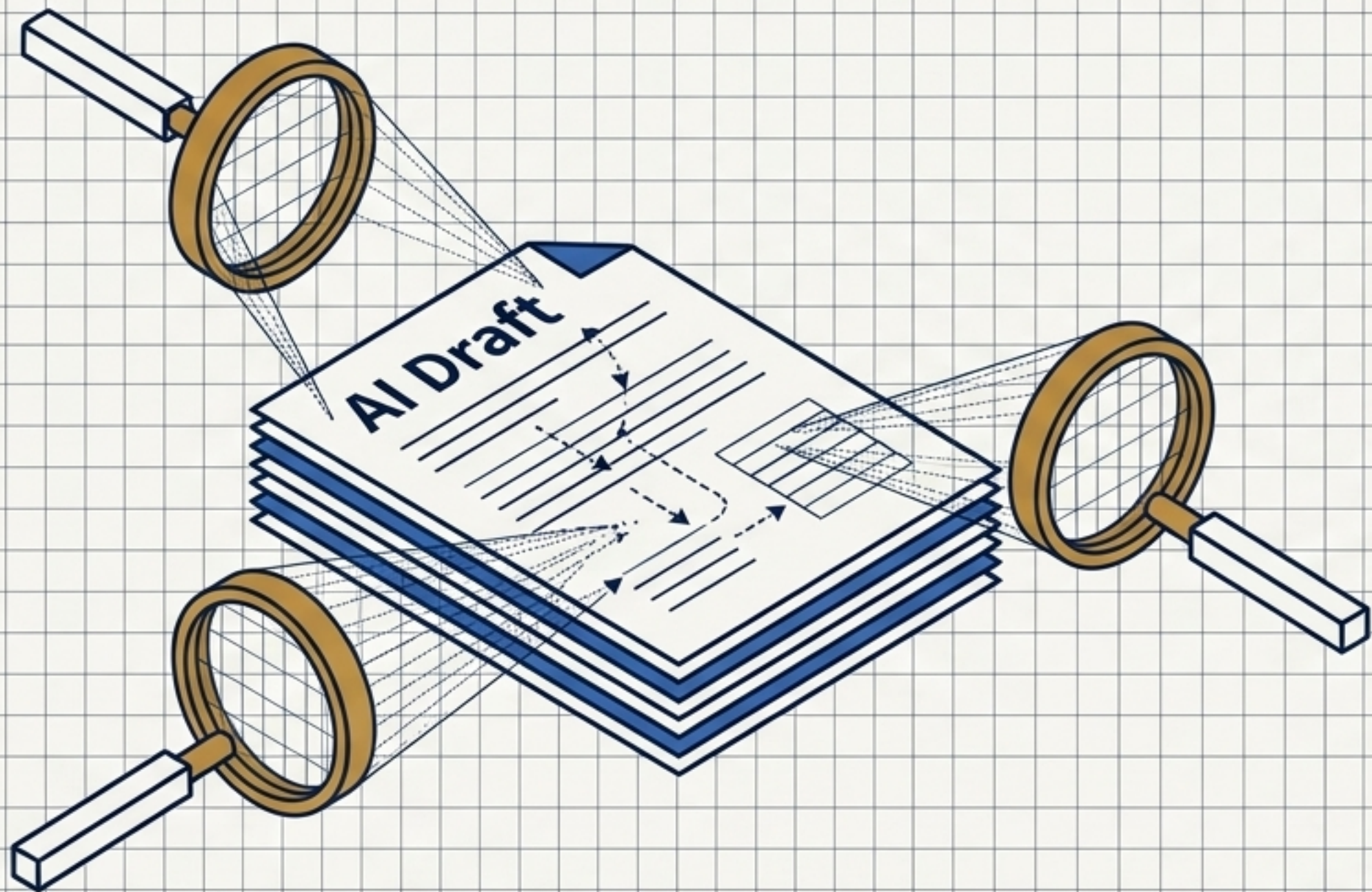
古い法改正前の記載、担当者の個人的な癖、権利行使に不利な表現を、AIが無批判に模倣・再生産する「Bad Habit Risk」。

対策：データガバナンス体制の構築

無効審判や権利侵害訴訟に耐え抜いた「優良明細書」のみを厳選。最新の審査基準・判例動向に合わせてナレッジを定期更新し、AIへ供給する。

専門性の再定義：「起草力」から「監査力」へのシフト

弁理士法第75条の遵守。AIの思考過程を統制し、法的判断の全責任を人間が負うための3つの監査レンズ。



1. 上位概念化の妥当性

競合の回避設計を阻止する適切な抽象化と境界画定が行われているか。

2. 代替実施形態の網羅性

均等論・将来技術を見据え、異なる部材や制御ロジックが網羅的に開示されているか。

3. 補正根拠の確保

将来の拒絶理由通知に備えた、有利な効果や限定補正の根拠（下位概念）が仕込まれているか。

多層的インフラ選定・運用戦略 (The Blueprint)

コア技術・パイオニア

周辺・防衛・マイナーチェンジ

未公開

【物理的遮断・オンプレミス】

(N-Cube等)

データ漏洩リスクを完全に
絶ち、熟練弁理士が請求項
設計を主導。



【Word統合/SaaS】

(ユアサポ、appia-engine等)

組織のお作法を踏襲しつつ、
作成工数と中間処理コストコ
ストの極限低減を追求。



公開情報・検証

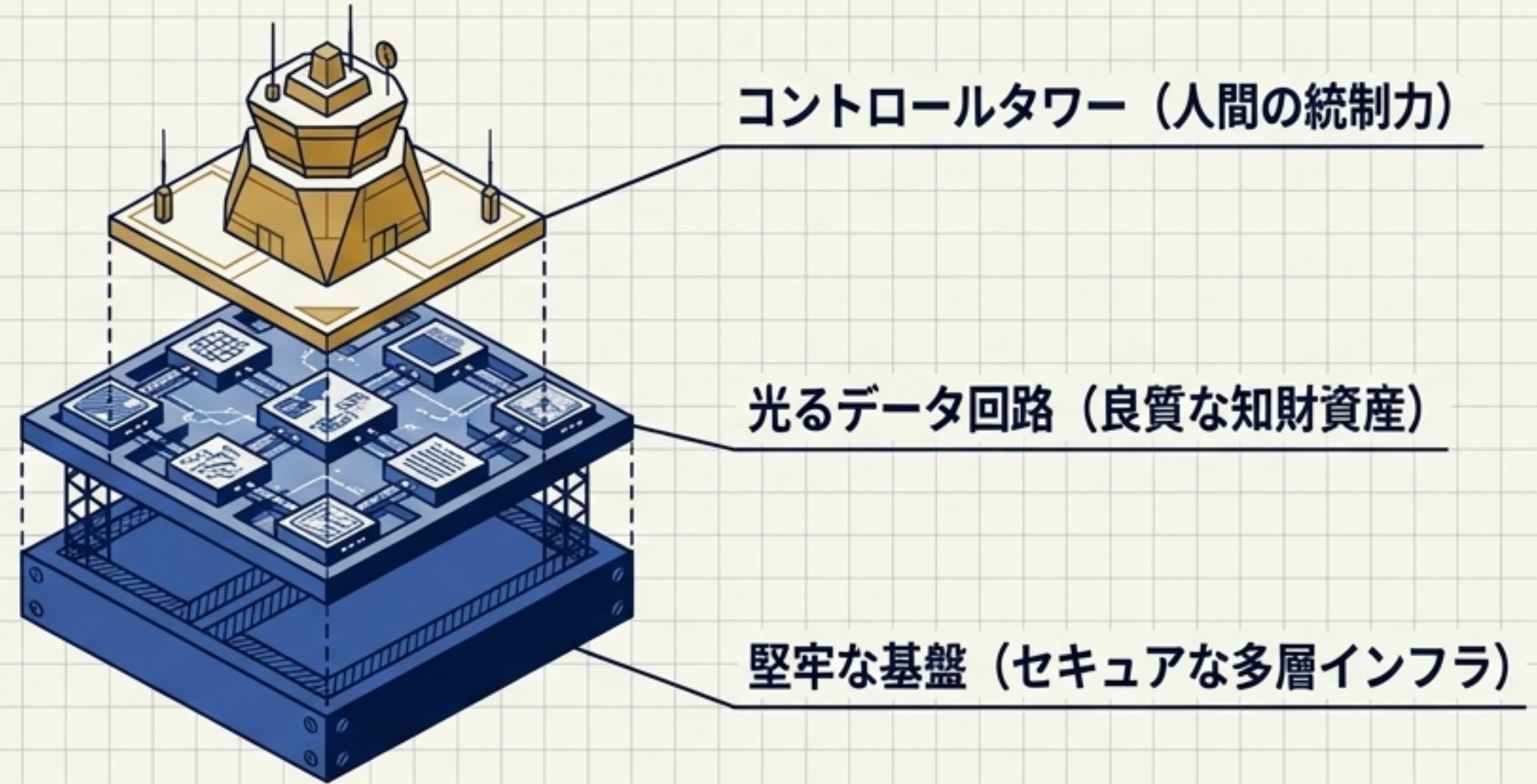
【MCP連携エージェント】

(サマリアMCP等)

最新LLMと外部DBを直結し、
50項目以上の記載不備チェ
ックと高度な文献照合を実行。



持続的な知財競争優位の源泉



結論：実戦的インフラの構築フェーズへ

AIツール単体の導入競争は終焉した。最強の知財組織とは、機密性に応じた【多層的インフラ】を配置し、【良質な知財資産】を絶えず供給しつつ、最終的な権利範囲の質を【人間の自律的な監査力】で統制し切る組織である。